

# 異なる対象へのケアギビングの性質の関連性

—子どもへのケアとパートナーへのケア—

教育心理学コース 大久保 圭 介

The relationships between internal working models of caregiving

—Care for child and care for partner—

Keisuke OKUBO

Caregiving behavior, the important element in dyadic relationship, occurred by activation of caregiving behavioral system. Repeat experiences of such activation constructs a type of mental representation, as a terminology in attachment theory, internal working model (IWM). It is said that such IWMs of caregiving are constructed for each recipient separately. The purpose of this study is to examine the relationship between IWMs of caregiving for different recipients and these influences toward parental sensitivity. From the results, caregiving IWM have high correlations between different recipients. In addition, attachment and caregiving toward marital partner show unique influences on sensitivity.

- 1 問題と目的
- 2 方法
  - A 調査参加者
  - B 調査内容
- 3 結果
- 4 考察
  - A ケアギビングIWM間の関連
  - B 感性との関連性
  - C 本研究の課題と今後の展望

## 1 問題と目的

私たちが誰を助けてあげたり、気持ちの面で思いやりを示したりすることは、社会的な生活をしていくうえで欠かせない。とりわけ、何か困っている人や助けを求めてきた人に対して適切なケアを提供できることは、相手に安心感を感じさせ、その後の成長や探索行動へとつながるという点で重要であるとされる (e.g., Bowlby, 1969)<sup>1)</sup>。誰かからケアを求められ、それに対してケアを提供するというプロセスは基本的に二者関係のなかで生じる。そのような二者の関係性においてなされる援助や気遣いとしてのケアギビングは、アタッチメント理論における重要な要素として考えられてきた (e.g., Shaver, Mikulincer, & Shemesh-Iron, 2010)<sup>2)</sup>。

アタッチメントは不安や苦痛から逃れ、身を守るた

めに、ケアの提供者に対して近接する行動のことであるのに対して、ケアギビングは相手のリスクを制御するために、相手に対してケアを提供する行動を指す。Bowlbyはそのような行動を生起させている基盤を、行動システム (behavioral system) という概念を動物行動学的な見地から援用して説明しようとした。行動システムは神経基盤に基づく内的なシステムであり、進化的にも私たちの生存と繁殖に必要なものとして選択的に残ってきたシステムであると考えられている。行動システムは設定された目標 (例えば、相手の不安を軽減すること) を達成することを目指し活性化し、行動を生起させる。しかし、例えば、自分が行ったケアが相手の欲していたケアには満たないものであり、結果として相手の不安が低減されない場合のように、ある目標を達成しようとする行動システムが活性化したにもかかわらず、その目標が達成できないような場合もある。そのように、目標を達成できない場合、結果として自分自身のケアの提供者としての自信を下げてしまうことにもつながる。そうした失敗経験が起ると、通常の戦略ではうまくいかないと判断され、代替の二次的戦略 (secondary strategy) が選択される。すなわち、今度こそ相手の欲求を満たすケアを提供しようとする必要以上にケアを提供してしまうような戦略が取られる。そのような、いわば過剰なケアは相手にとっても望ましいものではなく、ケアの提供者としての自

分自身の不安も高めてしまうことにつながる。行動システムの観点からは、そのような過剰に相手に関わるような戦略は行動システムが過活性 (hyperactivation) したことによって生起すると考えられている。行動システムの過活性戦略は、自分が達成したい目標を何としても達成するために、相手に過剰に関わり、強制するような戦略である。目標を達成するまで、慢性的に行動システムを活性化させ続けるが、このような戦略をとっても、望んでいた通りに目標が達成されることは少なく、結果的に自分について不安が高まり、相手に対して侵略的で制御的で攻撃的な反応が増え、社会的に不適応な結果をもたらす (Shaver et al., 2010)<sup>2)</sup>。

一方で、自分がどのようなケアを提供しても、相手はそれを享受しないのではないかという相手への不信感から、ケアの提供自体を止めてしまうような戦略は不活性 (deactivation) 戦略とされる。行動システムの不活性戦略は、目標が達成されないことで感じる葛藤や苦痛、不安を避けるために、行動システムの活性化を制御する戦略である。一次戦略の表出が禁止されたり認められなかったりするような環境によってそのような反応が形成されてしまう。不活性戦略をとることで、結果的に狭い範囲の対人関係にとどまることとなり、結果的に重要な目標を達成できなくなることにつながっていくとされる (Shaver et al., 2010)<sup>2)</sup>。

一次的戦略であれ二次的戦略であれ、行動システムの活性化の経験は、積み木のようにスクリプトとして保持される。そして、心理的な表象、すなわち内的作業モデル (Internal Working Model; 以下、IWMとする) として形成され、生涯発達の的に保持される (Bretherton, 1985)<sup>3)</sup>。例えば、自分の思うように相手にケアを与えることができないような経験が重なり、ケアギビングシステムの過活性戦略が繰り返し取られることによって、ケアの提供者としての自分への不安を伴った、相手に対して侵略的で不適切なケアを過剰に提供しうようなIWMが形成される。反対に、相手の欲求に適していないケアを提供してしまった際の、ネガティブなフィードバックがもたらす心理的ダメージや苦痛を低減するために、そもそものケアギビングシステムを活性化させないような戦略が繰り返し取られることによって、相手への共感が遮断され、ケアを与えることに関心が欠けた、回避傾向の高いIWMが形成されると考えられる。

アタッチメントは乳幼児期からの生存に必須の行動システムであり、早い段階から発達するのに対して、そのようなケアギビングについてのIWMは、基本的

に児童期以降、私たちがケアを求める立場から、誰かにケアを提供する立場へと移行していくなかで、次第に形成されていくと想定される (Solomon & George, 1996)<sup>4)</sup>。アタッチメントIWMは幅広い対人関係の取り結びに影響しうることから、初期のケアギビングはアタッチメントのIWMを基盤としてなされるものの、児童期以降の他者へのケアの経験を積み重ねることで、次第に独自の形成機序を経ると考えられている (George & Solomon, 2008)<sup>5)</sup>。過去に援助に失敗した経験や成功した経験があることが、現在のケアギビングIWMの過活性傾向、不活性傾向と関連することも示されている (大久保, 2018)。

これまでの研究のなかで、アタッチメントのIWMに関して、私たちは個別の対象に対して別個のIWMを形成していることが示唆されている (e.g., Fraley, Heffernan, Vicary, & Brumbaugh, 2011)<sup>6)</sup>。さらに、そのような関係性レベルの複数性があるのみならず、アタッチメントIWMは階層的にも形成されていると考えられている (e.g., Baldwin, Keelan, Fehr, Enns, & Koh-Rangarajoo, 1997)<sup>7)</sup>。すなわち、関係特異的なIWMのより上位に一般的な幅広い他者に対するIWMが構成されているとされる (Bretherton, 1985; Collins & Read, 1994)<sup>3) 8)</sup>。関係特異的なIWMと一般レベルのIWMは、関係性の良好さなどに対して異なる影響力を示すことから (e.g., Cozzarelli, Hoelstra, & Bylsma, 2000)<sup>9)</sup>、異なる表象であることが示されている。アタッチメントIWMに関するこのような一連の研究に鑑みると、ケアギビングIWMも複数、そして階層的に形成されている可能性が考えられる。

ケアギビングは元来、養育行動のサブセットであるとされていたが (Cassidy, 1999)<sup>10)</sup>、Hazan & Shaveer (1987)<sup>11)</sup>以降、アタッチメント研究が青年期以降のピア関係を対象としたものとして興隆したのと同様に、ケアギビングもピアレベルの二者関係である恋愛関係や夫婦関係において重要な要素の一つであると考えられてきた。とりわけ、育児期の夫婦においては、子どもへのケアとパートナーへのケアが同時的になされう。そこで本研究では、ケアギビングについてのIWMが対象ごとにどの程度関連しているのかということを明らかにするために、育児期における子どもへのケアギビングとパートナーへのケアギビングの関連を検討する。

また、養育者自身が良質なケアの提供者 (Quality caregiver) であることは、子どものアタッチメントの安定した発達につながる (Bell & Richard, 2000)<sup>12)</sup>。特

に、子どもへの感性が高いことは、Quality caregiverとしての特に重要な要素である。また、そのような感性が高いことは、親と子の間のアタッチメントの関連性の間にある溝 (transmission gap) をある程度埋めるものであると示されている (Verhoge et al., 2016)<sup>13)</sup>。そのような分脈では、子どもへの感性は親自身のアタッチメントについての心理的な表象の影響を受けるものであるという想定のもと、その関連性が検討されてきた (e.g., van IJzendoorn, Juffer, & Duyvesteyn, 1995)<sup>14)</sup>。しかし、私たちはアタッチメントについての心理的な表象とは別個のものとして、ケアギビングについての心理的な表象を形成していると考えられている (Shaver et al., 2010)<sup>2)</sup>。そのため、相手の欲求やシグナルを察知することに関わる感性は、アタッチメントに関する表象よりも、むしろケアを提供することについての表象の影響をより直接的に受けていると考えられる。本研究では、子どもへの感性に対して、どのレベルのIWMがどの程度影響しているのかということ明らかにすることも目的とする。

## 2 方法

### A 調査参加者

楽天インサイト㈱が保有するモニターのうち、0歳から5歳までの子どもをもつ男女1200名を対象としてweb調査を行った。1200名の内訳は、該当する子ども各年齢200名ずつで、200名のうち男女100名ずつとした。そして、調査項目群のなかにランダムで2箇所を用意した「私は、ここまでの質問項目を適当に読み、よく考えずに回答した」という項目に対して不適切な回答 (7件法で4以上) をした参加者を除いた908名を分析の対象とした。分析対象者の平均年齢は36.35歳で、年齢の標準偏差は5.85であった。

### B 調査内容

1. ケアギビングについてのIWMを測定するために、日本語版ケアギビング・システム尺度 (以下、CSS-Jとする) を用いた (大久保, 2018)<sup>15)</sup>。CSS-Jはケアギビングの過活性傾向と不活性傾向を測定する尺度であり、それぞれ10項目の20項目からなる尺度である。今回は、ケアを提供する対象に当たる部分の記述を、家族として考えたときに極めて重要になる「子ども」「現在のパートナー」の2つのケア対象と「一般的な他者」に改変して使用することで、異なる対象へのケアギビングの性質を測定した。なお、子どもについ

ては複数いる場合でも特定の1人の子どもについてのケアについて回答を求めた。回答は7件法で求めた。

2. アタッチメントについてのIWMを測定するために、古村・村上・戸田 (2016)<sup>16)</sup> によって作成されたECR-RS (Fralely et al., 2011)<sup>6)</sup> の日本語版を用いた。アタッチメントの対象に当たる部分を「現在のパートナー」「一般他者」と改変して測定した。アタッチメントの不安傾向と回避傾向を測定する尺度であり、合計9項目から構成される。ケアギビングと同様に7件法で回答を求めた。

3. 子どもへの感性を測定するために、CECPAQ (Comprehensive early childhood parenting questionnaire; Verhoeven, Deković, Bodden & van Baar, 2017)<sup>17)</sup> のうち、感性の測定に関わる4項目を用いた。子どもへの感性は従来観察法による測定が主流であったが (e.g., Ainsworth, Blehar, Waters, Wall, 1978)<sup>18)</sup>、その測定コストを考慮して自己報告式ではあるものの、養育者の感性を測定する尺度が作成されている。CECPAQについても、7件法での回答を求めた。

4. その他属性に関する項目として、回答者の年齢を尋ねた。

## 3 結果

それぞれの対象に関するケアギビング (子ども、パートナー、一般他者) の二次元 (過活性、不活性) と、アタッチメント (パートナー、一般他者) の二次元 (不安、回避)、子どもへの感性の記述統計を示す (Table 1)。子どもへの不活性傾向は他と比較して

Table 1 Descriptive statistics of variables

	Mean	SD	$\alpha$
CSS-Child Deactivation	2.70	.95	.90
CSS-Child Hyperactivation	3.50	.84	.83
CSS-Partner Deactivation	2.99	1.05	.93
CSS-Partner Hyperactivation	3.38	.96	.87
CSS-General Deactivation	3.36	.86	.90
CSS-General Hyperactivation	3.39	.94	.88
ECR-Partner Avoidance	3.15	1.15	.86
ECR-Partner Anxiety	3.19	1.35	.83
ECR-General Avoidance	4.14	.90	.77
ECR-General Anxiety	3.50	1.28	.88
Sensitivity(CECPAQ)	4.57	.87	.78

平均得点が低い値となったが、その他は信頼性係数も含めて妥当な結果となった。

そして、それぞれのIWMの傾向が、どの程度関連しているかということを検討するために、相関係数を算出した。全サンプルを同時に分析したものと別に (Table 2), 子どもの年齢ごとに相関係数を示した (Table 3~Table 8)。本研究の主題であるケアギビングの過活性傾向, 不活性傾向に着目すると (bold letter in tables), ケアギビング過活性傾向についてはサンプル全体でも  $r=.55-.70$ と高い値であり, 年齢ごとに見ても  $r=.47-.76$ と全体的に対象間で高い相関が示された。ケアギビング不活性傾向についても同様

に, サンプル全体でも  $r=.48-.61$ と高い値であり, 年齢ごとに見ても  $r=.42-.68$ と全体的に対象間で高い相関が示された。不活性, 過活性ともに年齢ごとの顕著な差は見られなかった。

続いて, 子どもの年齢ごとに, 子どもへの感性に対してそれぞれの要因の関連の程度を検討するために, 子どもへの感性を従属変数とした重回帰分析を子どもの年齢ごとに分けて行った (Table 9)。その結果, 全体的に, 子どもに対するケアギビングの不活性傾向が, 子どもへの感性に大きく影響を与えていることが明らかとなった。一方で, 回帰係数の大きさに年齢ごとにわずかな違いが見られた部分があ

Table 2 Correlations between variables (all age:  $n=908$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 CSS-Child Deactivation		.33 **	.61 **	.26 **	.48 **	.29 **	.37 **	.32 **	.08 *	.21 **	-.44 **
2 CSS-Child Hyperactivation			.19 **	.62 **	.26 **	.55 **	.14 **	.41 **	.14 **	.42 **	-.14 **
3 CSS-Partner Deactivation				.12 **	.53 **	.22 **	.67 **	.36 **	.08 *	.22 **	-.26 **
4 CSS-Partner Hyperactivation					.20 **	.70 **	.06	.57 **	.12 **	.49 **	-.16 **
5 CSS-General Deactivation						.11 **	.28 **	.28 **	.29 **	.16 **	-.27 **
6 CSS-General Hyperactivation							.15 **	.45 **	.04	.63 **	-.11 **
7 ECR-Partner Avoidance								.35 **	.17 **	.15 **	-.29 **
8 ECR-Partner Anxiety									.13 **	.44 **	-.17 **
9 ECR-General Avoidance										.10 **	-.14 **
10 ECR-General Anxiety											-.09 **
11 Sensitivity											

Note. \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

Table 3 Correlations between variables (age 0:  $n=149$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 CSS-Child Deactivation		.37 **	.59 **	.15	.54 **	.24 **	.42 **	.30 **	.08	.17 *	-.35 **
2 CSS-Child Hyperactivation			.09	.61 **	.30 **	.58 **	.04	.29 **	.16 *	.42 **	-.13
3 CSS-Partner Deactivation				.16	.60 **	.24 **	.73 **	.56 **	.07	.25 **	-.11
4 CSS-Partner Hyperactivation					.19 *	.70 **	.07	.54 **	.10	.48 **	-.07
5 CSS-General Deactivation						.18 *	.48 **	.36 **	.27 **	.20 *	-.19 *
6 CSS-General Hyperactivation							.10	.48 **	.02	.71 **	-.03
7 ECR-Partner Avoidance								.43 **	.17 *	.17 *	-.20 *
8 ECR-Partner Anxiety									.06	.38 **	-.11
9 ECR-General Avoidance										.04	-.09
10 ECR-General Anxiety											-.07
11 Sensitivity											

Note. \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

Table 4 Correlations between variables (age 1:  $n=155$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 CSS-Child Deactivation		.32 **	.54 **	.22 **	.43 **	.21 *	.41 **	.31 **	-.04	.09	-.47 **
2 CSS-Child Hyperactivation			.23 **	.57 **	.09	.52 **	.26 **	.36 **	.22 **	.39 **	-.19 *
3 CSS-Partner Deactivation				.02	.50 **	.15	.70 **	.25 **	-.09	.13	-.26 **
4 CSS-Partner Hyperactivation					.09	.65 **	.09	.52 **	.16 *	.36 **	-.17 *
5 CSS-General Deactivation						.03	.25 **	.23 **	.12	.07	-.26 **
6 CSS-General Hyperactivation							.14	.38 **	.15	.47 **	-.12
7 ECR-Partner Avoidance								.37 **	.00	.13	-.30 **
8 ECR-Partner Anxiety									.10	.34 **	-.23 **
9 ECR-General Avoidance										.19 *	-.15
10 ECR-General Anxiety											-.09
11 Sensitivity											

Note. \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

Table 5 Correlations between variables (age 2:  $n = 149$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 CSS-Child Deactivation		.31 **	.56 **	.32 **	.48 **	.30 **	.30 **	.27 **	.09	.26 **	-.51 **
2 CSS-Child Hyperactivation			.34 **	.59 **	.33 **	.47 **	.23 **	.50 **	.04	.27 **	-.12
3 CSS-Partner Deactivation				.32 **	.56 **	.27 **	.66 **	.38 **	.11	.23 **	-.37 **
4 CSS-Partner Hyperactivation					.30 **	.76 **	.13	.54 **	.12	.51 **	-.14
5 CSS-General Deactivation						.04	.26 **	.27 **	.25 **	.09	-.36 **
6 CSS-General Hyperactivation							.15	.43 **	.00	.67 **	-.09
7 ECR-Partner Avoidance								.29 **	.11	.12	-.36 **
8 ECR-Partner Anxiety									.14	.44 **	-.08
9 ECR-General Avoidance										.06	-.17 *
10 ECR-General Anxiety											-.03
11 Sensitivity											

Note. \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ Table 6 Correlations between variables (age 3:  $n = 140$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 CSS-Child Deactivation		.20 *	.68 **	.23 **	.47 **	.31 **	.42 **	.29 **	.06	.22 **	-.49 **
2 CSS-Child Hyperactivation			.11	.67 **	.38 **	.56 **	.01	.39 **	.07	.51 **	-.11
3 CSS-Partner Deactivation				.08	.48 **	.27 **	.65 **	.26 **	.02	.20 *	-.31 **
4 CSS-Partner Hyperactivation					.28 **	.67 **	.03	.56 **	.16	.50 **	-.16
5 CSS-General Deactivation						.10	.29 **	.34 **	.36 **	.29 **	-.31 **
6 CSS-General Hyperactivation							.24 **	.46 **	-.08	.64 **	-.16
7 ECR-Partner Avoidance								.36 **	.18 *	.08	-.43 **
8 ECR-Partner Anxiety									.24 **	.40 **	-.26 **
9 ECR-General Avoidance										-.01	-.27 **
10 ECR-General Anxiety											-.13
11 Sensitivity											

Note. \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ Table 7 Correlations between variables (age 4:  $n = 153$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 CSS-Child Deactivation		.43 **	.61 **	.44 **	.50 **	.44 **	.32 **	.40 **	.10	.30 **	-.44 **
2 CSS-Child Hyperactivation			.17 *	.65 **	.32 **	.57 **	.15	.48 **	.17	.45 **	-.19 *
3 CSS-Partner Deactivation				.13	.52 **	.22 **	.59 **	.31 **	.12	.17 *	-.31 **
4 CSS-Partner Hyperactivation					.26 **	.70 **	.06	.74 **	.05	.51 **	-.26 **
5 CSS-General Deactivation						.22 **	.15	.22 **	.38 **	.08	-.24 **
6 CSS-General Hyperactivation							.16	.58 **	.10	.64 **	-.16 *
7 ECR-Partner Avoidance								.30 **	.22 **	.11	-.33 **
8 ECR-Partner Anxiety									.06	.56 **	-.33 **
9 ECR-General Avoidance										.03	-.09
10 ECR-General Anxiety											-.14
11 Sensitivity											

Note. \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ Table 8 Correlations between variables (age 5:  $n = 162$ )

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 CSS-Child Deactivation		.33 **	.62 **	.29 **	.42 **	.27 **	.28 **	.28 **	.17 *	.22 **	-.50 **
2 CSS-Child Hyperactivation			.25 **	.64 **	.15	.56 **	.16 *	.42 **	.21 **	.45 **	-.10
3 CSS-Partner Deactivation				.12	.47 **	.23 **	.67 **	.36 **	.22 **	.33 **	-.30 **
4 CSS-Partner Hyperactivation					.16	.69 **	.03	.54 **	.19 *	.54 **	-.10
5 CSS-General Deactivation						.09	.23 **	.25 **	.34 **	.25 **	-.29 **
6 CSS-General Hyperactivation							.17 *	.38 **	.05	.66 **	-.08
7 ECR-Partner Avoidance								.33 **	.29 **	.26 **	-.20 *
8 ECR-Partner Anxiety									.18 *	.45 **	-.06
9 ECR-General Avoidance										.26 **	-.15
10 ECR-General Anxiety											-.08
11 Sensitivity											

Note. \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

あった。2歳の子どもと5歳の子どもへの敏感性は、わずかではあるが女性の方が男性よりも高くなることが示された。また、パートナーへのケアギビング不活性傾向が高いことは、0歳と2歳の子どもにおいて

敏感性と顕著に関連していることも示された。また、パートナーへのアタッチメント回避傾向が高いことは全年齢を通して、敏感性に負の影響を与えていることも示された。

Table 9 Regression coefficients of sensitivity from attachment and caregiving

	age 0		age 1		age 2		age 3		age 4		age 5	
	$\beta$	SE	$\beta$	SE	$\beta$	SE	$\beta$	SE	$\beta$	SE	$\beta$	SE
Parent sex (1=Male, 2=Female)	0.03	0.05	0.06	0.1	0.14 *	0.25	0.06	0.11	0.1	0.16	0.25 ***	0.45
ECR-Partner Avoidance	-0.23 *	-0.18	-0.19	-0.15	-0.26 **	-0.19	-0.37 ***	-0.28	-0.23 *	-0.16	-0.13	-0.11
ECR-Partner Anxiety	-0.08	-0.05	0	0	0.09	0.06	0.01	0	-0.13	-0.08	0.13	0.09
ECR-General Avoidance	-0.20	-0.19	-0.140	-0.138	-0.077	-0.084	-0.149	-0.141	-0.007	-0.006	.003	.003
ECR-General Anxiety	-0.127	-0.084	-0.012	-0.009	.087	.065	-0.073	-0.049	-0.031	-0.019	-0.042	-0.029
CSS-Child Deactivation	-0.470 ***	-0.412	-0.418 ***	-0.378	-0.443 ***	-0.442	-0.501 ***	-0.473	-0.392 ***	-0.341	-0.532 ***	-0.528
CSS-Child Hyperactivation	.061	.066	.039	.041	.064	.073	-.009	-.009	.084	.083	.023	.024
CSS-Partner Deactivation	.403 **	.310	.110	.097	.092	.082	.289 *	.237	.091	.071	.054	.049
CSS-Partner Hyperactivation	-.093	-.082	-.069	-.069	-.061	-.061	-.020	-.018	-.119	-.104	.024	.021
CSS-General Deactivation	-.038	-.037	-.079	-.089	-.127	-.126	-.026	-.026	-.052	-.047	-.083	-.097
CSS-General Hyperactivation	.172	.154	.032	.033	-.019	-.018	.052	.049	.189	.169	.008	.007
R square	.187		.214		.379		.381		.286		.339	

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

#### 4 考察

本研究では、特にケアギビングのIWMに着目し、その二次元（過活性・不活性）の異なるレベルでの関連性を明らかにすること、子どもへの敏感性という資質に対するそれらのIWMの傾向の影響の程度を明らかにすることを目的としたものであった。

##### A ケアギビングIWM間の関連

本研究の結果では、ケアギビング一般他者レベルのIWMと関係特異レベル（子ども、パートナー）のIWMのそれぞれの間に高い相関が示された。これは、古村他（2016）<sup>16)</sup> やFralely et al. (2011)<sup>6)</sup> で見られることなる対象へのアタッチメント間の相関よりも高いものであった。このことから、子どもへのケアとパートナーへのケアという明らかに別質なものを、そのケアを提供する基盤としてのケアギビングIWMの性質は似ているものと言えるかもしれない。すなわち、パートナーに対して過剰に不適切なケアを提供してしまうような人は、子どもに対しても同様に必要以上のケアを提供してしまうような性質であると言える。具体的な対象を問わない一般的なレベルのIWMとの相関も高いことから、ケアギビングに関しては、個々の対象へのIWMを別個に形成している一方で、比較的共通した性質を持つ基盤があると想定することも可能であ

る。養育であっても、非血縁へのケアであってもケアに関して活性化する脳部位は類似していることが示されていることから（Swain et al., 2012; Brown, Brown, & Preston, 2011）<sup>19)20)</sup>、共通した一つの基盤を想定する方が場合によっては適切かもしれない。

私たちは、一般的なレベルのIWMを基盤として、個々の関係性における取り結びのなかで異なる性質のIWMを分化させ、独自に形成させていく。したがって、0歳の子どもへのケアギビングIWMは一般的なケアギビングIWMと非常に似た性質のものになるが、子どもの年齢が上がるにつれ、その相関の値が小さくなると考えられた。すなわち、出産直後の子どもへのケアと比べて、5歳の子どもへのケアの方が、当該児との個別のケア関係を経過している分、個別の性質を持つと考えられる。しかし、今回の結果からは、そのような傾向は見られず、どの年齢の子どもに対しても、一般レベルのケアギビングIWMと子どもに対するケアギビングIWMの関連は同程度であった。出産というライフイベント自体が、内的な神経基盤の変化を含めて（e.g., Kinsley et al., 1999）<sup>21)</sup>、ケアギビングのIWMに大きな変化をもたらす可能性が考えられている（George & Solomon, 2008）<sup>5)</sup>。そのため、出産を経たあとは、子どもへのケアの性質は大きく変化しないという可能性も考えられる。産前の親の一般レベルのケアギビングIWMと産後の子どもへのケアのIWM

の傾向を比較することが必要だと考えられる。

## B 感性との関連性

各年齢における共通した結果として、子どもへのケアギビングの不活性傾向が大きく感性に影響を与えている。子どもへのケアギビングIWMは子どもへのケアに関わる心理的な基盤であるため、感性と大きく関連することは想定される結果である。その一方で、より一般的なレベルのケアギビングIWMは他の変数と一緒にモデルに投入すると、子どもへの感性ということに関しては、関連を示さなかった。当該関係におけるアウトカムに関しては、その関係特異的なIWMの方がより大きな影響力をもつことはアタッチメント研究のなかでも示されており (e.g., Cozzarelli, Hoekstra, & Bylsma, 2000)<sup>9)</sup>、本研究も同様の結果となった。

また、パートナーへのアタッチメント回避傾向の高さも、概ね全年齢の子どもに対する感性に対して、負の影響を示していることが読み取れる。すなわち、パートナーに対して回避的である場合、子どもへの感性も低くなると解釈できる。回避的な項目と養育の回避 (=感性の低さ) が関連した可能性も考えられるが、パートナーに対して、ケアを求めたり積極的に相談したりすることに回避的である場合、パートナーからのサポートを得ることが難しい関係性であり、夫婦での協働養育を制御してしまうため (Schoppe-Sullivan, Settle, Lee, & Dush, 2016)<sup>22)</sup>、子どもへケアを提供するための物理的・精神的な資源が不足、すなわち子どもへの感性が低くなることにつながるのではないかと考えられる。また、夫婦関係において相手へのアタッチメント回避傾向が高いことはその関係性の満足度や良好さを下げることに繋がる (e.g., Harma & Sumer, 2015)<sup>23)</sup>。そのような関係性の不和によるストレスは、子どもへのケアギビングの資源や活力を搾取するとされ (Belsky, 1984; Levy-Shift, Dimitrovsky, Shulman, & Har-Even, 1998)<sup>24/25)</sup>、結果的にパートナーに対してアタッチメントが回避的であることが、子どもへの感性の低さに間接的な影響を示したとも考えられる。

さらに、0歳と3歳においては、パートナーへのケアギビング不活性傾向が高いほど、感性が高くなるという影響が比較的大きく見られた。すなわち、パートナーに対してケアを提供することに回避的である人は、一転、子どもに対する感性は高いということになる。このような結果は、本来パートナーに提供するのはケア資源がパートナーに提供されない関係性で

あることで、その分、子どもに対するケアに割かれていることによるものだと考えられる。しかし、このような場合、子どもへの感性が高い反面、パートナーに対してケアやサポートが提供されにくいいため、パートナーのストレスや、パートナーの養育参加を阻害するようなゲートキーピング行動につながる可能性も考えられる。また、0歳において、その影響が強く見られたのは、産後で一際子どもへのケアが重要となるためであり、3歳において、パートナーへのケアギビング不活性傾向が感性と関連していたのは、おおよそ次のきょうだいが生まれる年齢であることから、その3歳児自体への感性を高める必要もあり、結果としてパートナーへのケア資源の低さと関連した可能性が考えられる。

## C 本研究の課題と今後の展望

本研究では、主にケアギビングIWM間の関連性、および子どもへの感性へのそれらの関連を検討してきた。本論の主題でもあるIWMは行動システムの活性化の経験が心理的な表象として形成されるという考えから、過活性傾向と不活性傾向の二次元からなるものとして捉えられている。本論では自己報告式の心理尺度によってそのIWMの二次元を測定しているが、元来は心理的な表象であり、比較的深層に形成されているものである。アタッチメント研究においても、Adult attachment interview (George, Kaplan, Main, 1985)<sup>26)</sup>などの面接法を用いて深層レベルの表象を測定している。今後も測定の妥当性やIWMという構成概念について議論がなされていくべきである。また、ケアギビングのIWMの測定に関して、本調査では20項目からなる尺度を異なる対象を想定して合計60項目への回答を求めている。回答者にとっても負担になるだけでなく、測定上、類似した項目に回答することで、結果的に高い相関に繋がっている可能性も考えられる。ケアギビングのIWMの複数性や階層性についてのさらなる研究が蓄積されるためにも、多数の対象を想定した回答を得ることを目的としたECR-RS (Fraleley et al., 2011)<sup>6)</sup>のような短縮版の尺度の必要性もあるかもしれない。

感性との関連について、本研究では、特定の子ども1人についての感性を問題としてきたが、子どもの人数やきょうだいの変数、保育園や幼稚園などへの通園の有無なども、子どもの感性および家族のなかでのケア関係にとって大きな要因であると考えられる。本研究では測定していないため、検討はできない

が、特定の年齢においてのみ示された関連性を説明できる可能性もある。また、感受性に関しても従来は観察法によって測定することが主流であった。自己報告式の心理尺度を用いた研究は多くはなく、その妥当性についても十分に検討する必要があるだろう。

ケアギビングはアタッチメント理論において重要な要素であるにも関わらず、アタッチメントと比較して研究数自体が少ないことが指摘されている (e.g., Bell & Richard, 2000)<sup>12)</sup>。本論は、個人内におけるケアギビングのIWM間の関連性について検討したものであるが、アタッチメントとケアギビングは互いに埋め込まれた関係性であるため、二者関係のなかで互いの関連性について検討していくような研究も一層必要だと考えられる。

### 引用文献

- 1) Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Volume I: Attachment. *The International Psycho-Analytical Library*, 79, 1-401.
- 2) Shaver, P. R., Mikulincer, M., & Shemesh-Iron, M. (2010). A behavioral-systems perspective on prosocial behavior. In *Prosocial motives, emotions, and behavior: The better angels of our nature*. (pp. 72-91).
- 3) Bretherton, I. (1985). Attachment Theory: Retrospect and Prospect. In *Monographs of the Society for Research in Child Development, Vol. 50, No. 1/2, Growing Points of Attachment Theory and Research* (pp. 3-35).
- 4) Solomon, J., & George, C. (1996). Defining the Caregiving System: Toward a Theory of Caregiving. *Infant Mental Health Journal*.
- 5) George, C., & Solomon, J. (2008). The caregiving system: A behavioral systems approach to parenting. In *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications (2nd ed.)* (pp. 833-856).
- 6) Fraley, R. C., Heffernan, M. E., Vicary, A. M., & Brumbaugh, C. C. (2011). The experiences in close relationships—Relationship Structures Questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment*, 23(3), 615-625.
- 7) Baldwin, M. W., Keelan, J. P. R., Fehr, B., Enns, V., & Koh-Rangarajoo, E. (1996). Social-cognitive conceptualization of attachment working models: Availability and accessibility effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71(1), 94-109.
- 8) Collins, N. L., & Read, S. J. (1994). Cognitive representations of adult attachment: The structure and function of working models. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships* (Vol. 5, pp. 53-90). London: Jessica Kingsley.
- 9) Cozzarelli, C., Hoekstra, S. J., & Bylsma, W. H. (2000). General Versus Specific Mental Models of Attachment: Are They Associated with Different Outcomes? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26(5), 605-618.
- 10) Cassidy, J. (1999). The nature of the child's ties. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp. 3-20). New York, NY, US: Guilford Press.
- 11) Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52(3), 511-524.
- 12) Bell, D. C., & Richard, A. J. (2000). Caregiving: The Forgotten Element in Attachment. *Psychological Inquiry*, 11(2), 69-83.
- 13) Verhage, M. L., Schuengel, C., Madigan, S., Pasco Fearon, R. M., Oosterman, M., Cassibba, R., & Van IJzendoorn, M. H. (2016). Narrowing the transmission gap: A synthesis of three decades of research on intergenerational transmission of attachment. *Psychological Bulletin*.
- 14) van IJzendoorn, M., Juffer, F., & Duyvesteyn, M. G. C. (1995). Breaking the intergenerational cycle of insecure attachment. *A Review of the Effects of Attachment-Based Interventions on Maternal Sensitivity and Infant Security*.
- 15) 大久保 圭介 (2018). 日本語版ケアギビング・システム 尺度の作成と妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 89, 281-291.
- 16) 古村 健太郎・村上 達也・戸田 弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) の妥当性評価 心理学研究, 87, 303-313.
- 17) Verhoeven, M., Deković, M., Boddien, D., & van Baar, A. L. (2017). Development and initial validation of the comprehensive early childhood parenting questionnaire (CECPAQ) for parents of 1-4 year-olds. *European Journal of Developmental Psychology*.
- 18) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation. *Journal of the American Academy of Religion*.
- 19) Swain, J. E., Konrath, S., Brown, S. L., Finegood, E. D., Akke, L. B., Dayton, C. J., & Ho, S. S. (2012). Parenting and Beyond: Common Neurocircuits Underlying Parental and Altruistic Caregiving. *Parenting*.
- 20) Brown, S. L., Brown, R. M., & Preston, S. D. (2012). The Human Caregiving System: A Neuroscience Model of Compassionate Motivation and Behavior. In *Moving Beyond Self-Interest: Perspectives from Evolutionary Biology, Neuroscience, and the Social Sciences*.
- 21) Kinsley, C. H., Madonia, L., Gifford, G. W., Tureski, K., Griffin, G. R., Lowry, C., ... Lambert, K. G. (1999). Motherhood improves learning and memory. *Nature*.
- 22) Schoppe-Sullivan, S. J., Settle, T., Lee, J. K., & Kamp Dush, C. M. (2016). Supportive Coparenting Relationships as a Haven of Psychological Safety at the Transition to Parenthood. *Research in Human Development*.
- 23) Harma, M., & Sümer, N. (2015). Are avoidant wives and anxious husbands unhappy in a collectivist context? Dyadic associations in established marriages. *Journal of Family Studies*, 9400 (June 2015), 1-17.
- 24) Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: a process model. *Child Development*, 55(1), 83-96.
- 25) Levy-Shiff, R., Dimitrovsky, L., Shulman, S., & Har-Even, D. (1998). Cognitive appraisals, coping strategies, and support resources as correlates of parenting and infant development. *Developmental Psychology*.
- 26) George, C., Kaplan, N., & Main, M. (1985). The adult attachment interview. *University of California at Berkeley: Unpublished Manuscript*.



本研究の一部は前川財団平成29年度家庭・地域社会教育助成の助成によって行った。また、本研究の一部は日本心理学会第82回大会（2018）において発表された。

（指導教員 遠藤利彦教授）